

畜産

【めん羊】 一種付け準備と交配方法—

1 種雄羊の準備

血統、体型、発育など遺伝的能力の優れた種雄羊を選び、交配時のボディーコンディションは3.5ぐらいに整えます。

《留意点》○精巣、陰茎の触診検査 ○腐蹄症の予防と治療 ○内部寄生虫の駆除 ○風通しの良い涼しい場所での管理 ○雌羊との隔離

2 交配時期と方法

出荷時期、飼料事情などを考慮して、自分に適した分娩時期を選び、分娩時期から逆算して交配時期を決めます(サフォークでは8～9月交配で1～2月分娩、1～2月交配で6～7月分娩)。

《自然交配の方法》

○種雄羊1頭に対して雌羊45頭前後 ○交配期間は6～7週間、発情周期が約17日間ですから2.5回の交配機会があります。○種雄羊にマーキングハーネス(胸部に取り付けたクレヨン)を装着。乗駕すると雌の腰にクレヨンが付着し、毎日の観察・記録により分娩日を予測できます。

3 雌羊の準備

○繁殖季節の長さは品種によって異なり、サフォークの繁殖期は通常9月から2月中旬までの約180日間あります。

○排卵数は栄養状態によって左右されるので、ボディーコンディションは2.5～3.0の中程度が望ましい。《留意点》○乳房、歯、外陰部の検査・腐蹄症の予防と治療 ○内部寄生虫の駆除・外陰部周辺の毛刈り

4 雌羊の栄養状態の改善＝フラッシング

舎飼管理：交配2～3週間前から高栄養価の飼料を給与

放牧管理：良好な放牧地に移す。放牧地の状態が良くない場合は濃厚飼料の給与が必要

5 雌羊のボディーコンディションと対応

腰部の背骨とその周囲の肉や脂肪の付き具合を手で触れて点数をつけます。

《BCSと飼料給与の目安》

1：(個々の背骨の突起が区別できる) 群負けしているので、別飼いで増飼い。

2と2.5：(背骨が滑らかな波状) 交配前に増飼いします。

3.5：(強く押すと突起が分る) 平均以上の肉付きであるが、繁殖性を損なうほど太ってはいないので、通常飼育でよい。

4と4.5：(太い線の様で突起はわからない) 飼料をおさえて体重を減らす。

【肥育牛】 一仕上げ期の食い止まり対策— (俵牛づくりより)

仕上げ期の食い止まりでは、飼料摂取量をピーク時の1kg前後の減少に留めて肉質の締りを保ちます。ビタミンAを補充しても大丈夫な時期なので、ビタミンAを適度に補充します。

仕上げ期はとうもろこし、大麦などの穀物を多給し、粗飼料はそれによるルーメン発酵の調整の道具と考えます。

牛の観察は、飼料の食べ具合、反芻の程度、牛が寝ているか、糞の状態を見て、小技を使い出荷まで管理します。

1 さまざまな小技

- ①**飼料の半日切り**・・・飼料を残すようになったら濃厚飼料を半日分切ります。粗飼料、水は通常に給与します。毎週1回定期的に行っても良いですが、連続は避けます。牛房の頭数が多いとボス牛が独占して食べてしまうので、逆効果になる場合が多いです。
- ②**粗飼料を工夫する**・・・カットした稲わらに変える、バカスに変える、ホールクロップを仕上げ期には使用する。ルーメン発酵の良い牛は寝ながら反芻しています。反芻すればするほどルーメン環境は良くなります。
- ③**生菌剤を活用する**・・・ヒトではO157が胃腸に入っても直ぐに納豆を食べることで発症を防ぐことが知られています。肉牛でも同じで、ボバクチン、ビオスリー、トルラミンなど自分の農場にあった生菌剤を必ず1種類は常備しましょう。
- ④**魔法のほうき**・・・飼料を残すようになったら、マメにほうきで掃き集め、やまを作り、生菌剤またはゼオライトを振り掛けます。大抵の牛はその飼料を食べてくれます。
- ⑤**大豆粕、トウモロコシ、強肝剤**・・・大豆粕やヘイキューブを少し与えると食い止まりが解消する場合があります。荒めのコーンや圧ペンは嗜好性を上げて摂取量を保ちます。強肝剤を利用して摂取量を維持させる技術もあります。
- ⑥**2頭、1頭飼いにする**・・・肥育中の牛の移動は最小限にしますが、仕上げ期に相性のいい牛を2頭飼いすると、①牛が飼料を十分に食べ、ゆっくりと休めます。②1頭毎の個体観察が行き届きます。
- ⑦**仕上げ期のビタミンA**・・・ビタミンAの濃度が明確なビタミンA剤や飼料添加物で対処します。和牛なら出荷まで3回補給できます。交雑種では飼料摂取量を優先してビタミンA混合飼料を定期的に与えます。

【酪農】 一乾乳期の管理一

乳牛が健康で泌乳するためには、分娩後の疾病をいかに少なくするかにかかっています。そのためには乾乳期の適正な管理が大切です。

1 乾乳管理の目指すもの

- (1) 泌乳期を終えての休息期間 (2) 第一胃での、胃壁絨毛の退行と新たな成長
 (3) 乳房内では、乳腺が退行し、新たな再生が行われる (4) 胎児の成長を支えるための栄養摂取 (5) 分娩時、骨から大量に放出されるカルシウムに備えての準備

2 乾乳期管理のポイント

乾乳期間は、分娩まで60日間を必要とし、最低でも50日以下としないようにします。

乾乳期の管理は、分娩までの期間を二つのステージに分けて管理することが推奨されています。

【乾乳前期】 乾乳開始から分娩21日前

- 乾乳方法は、乾乳牛を別飼いし、一発乾乳が望ましい ○給水制限はしない ○乾物摂取量確保のため、嗜好性の高い粗飼料を給与する ○糞の堅さをみて、濃厚飼料を増減する ○放牧地で飼養する場合は、乾物不足にならないように粗飼料を併給する

【乾乳後期】 分娩前21日から分娩まで

- 粗飼料は、イネ科単播1番草か低水分ラップサイレージが望ましい ○カルシウム含量の高い配合飼料、マメ科を多く含む粗飼料、アルファルファ製品、ビートパルプは給与しない ○鈹塩等の塩は給与しない ○粗飼料の粗タンパク質(CP)が低い場合は、分娩時の乳房の張りが悪くなるため、糞の状態をみて大豆粕等で調整する。但しCP濃度を上げすぎると(乾物中15%以上)疾病が多くなる可能性があるため、飼料計算に基づいて給与して下さい ○清潔な分娩房を確保し、分娩に際しては、けい留しないで自然分娩が望ましい。